

都市鎌倉における渥美・常滑焼の使われ方

鶴見大学文学部 教授 河野 眞知郎

鶴見大学の河野です。というよりも、「鎌倉の河野です」と言った方がよいかもしれません。長らく鎌倉で発掘していましたが、報告書出版後は出土品の大部分が倉庫に入ってしまうとその資料を再検討することは困難なので、本日のレジュメの資料もかなり古いものばかりになってしまいました。さらに生産地での編年は非常にきっちりと把握されてきたのに対し、私の興味が「生活文化」なので、やや厳密さを欠いているかもしれません。そのあたりについてはご斟酌いただければと思います。

1. 渥美焼

鎌倉に入ってくる渥美製品の問題からお話します。20年ほど前までは、渥美の鉢、壺・甕に関しては、あまり認識されていなかったというか、常滑の山茶碗や鉢類と破片状態では、きっちり区別できていなかったかと思います。整理段階で細かく分類できておらず、鎌倉における渥美製品の出土状況に関しては、まとまった考察ができておりません。

(1) 鎌倉出土の器種

鎌倉から出土した渥美焼の器をご覧ください(図1)。

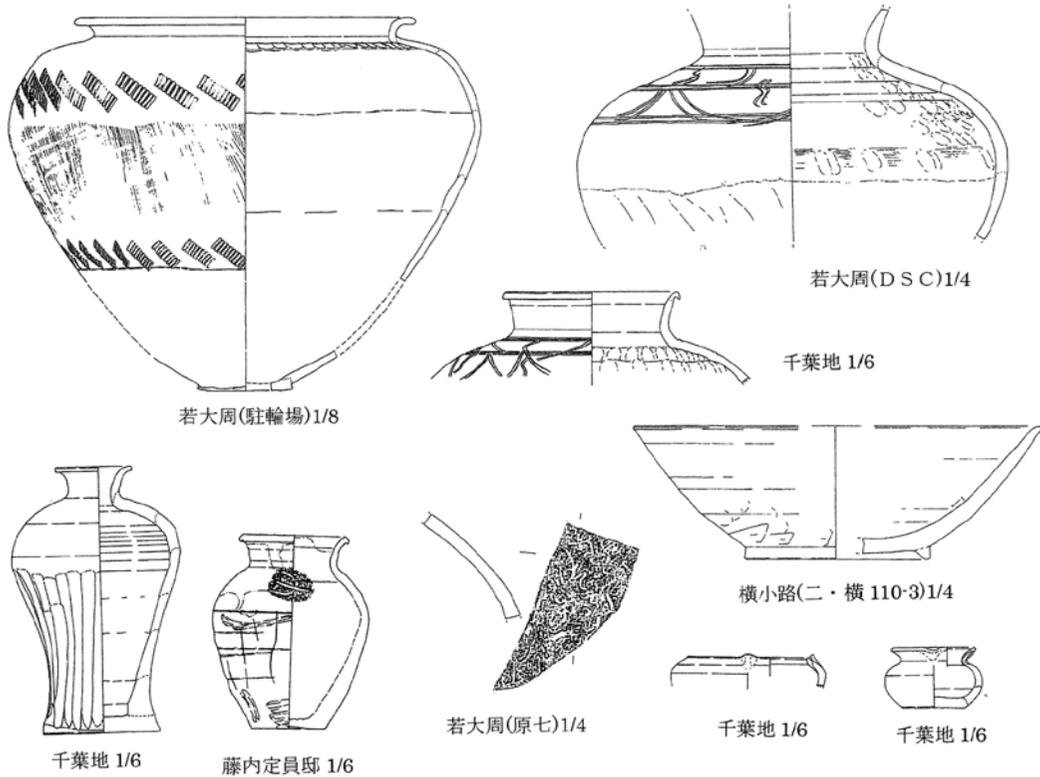


図1 鎌倉出土の渥美焼器種

13世紀前半まで——鎌倉が大都市になるまで——甕・壺・鉢が一定量使われていた。その後、常滑焼にとってかわられる。

大甕は、口縁の作り等が2 b期あたりのものです。壺は、蓮弁文様のものが2 a期あたりのものではないかと思われます。

千葉地遺跡で出土している瓶子は、渥美製品としては珍しいもので、今回の『愛知県史』にも採用されています。これは2 b期あたりのものではないかと思われます。

また、藤内定員邸の壺も2 b期あたりのものだと思いますが、同様の壺が、どういうわけか時々、普通の屋敷地からも出土します。大甕に関しては、たいてい埋甕として使用されていたと思われませんが、はっきりした遺構に伴う例はありません。定形品のものは一例ありますが、工事で引っかかっただけのものなので、使い方の状況はよくわかりません。

鉢についても、2 b期あたりのものと考えられます。鉢の内側には磨滅が認められます。

(2) 永福寺経塚

このような渥美製品の出土状況において一番注目しているのは、永福寺経塚のものです（図2）。これは『愛知県史』にも引用されており、また今回の渥美の報告にもありました。出土時にその編年の位置については明確ではありませんでしたが、平泉の八重樫さんが「1200年前後」とおっしゃったので、それをすっかり信じ込んできました。

永福寺は、源頼朝が建てた寺です。奥州平泉を攻め滅ぼした後、1192年頃に完成されました。経塚は、その向かいにある二階堂の正面の山の上から見つかりました。源頼朝が亡くなったのは1199年で、経塚が1200年前後のものとなると、甕を埋めたのは誰なのか。それについては地元でも意見が分かれます。経筒の外側に一緒に埋められていた副納品のなかには扇子や櫛があり、私は「政子が入れた」と考えました。ただ、扇子は必ずしも女物ではないということで、他の人からは「頼朝自身が、寺が完成した時に埋めたのではないか」という説も出ています。いずれにしても、先ほどの渥美の報告にあったように、ある時期の渥美の使われ方として納得できます。ただし、

この渥美の大甕と鉢、特に片口鉢は経塚のために持ち込まれたのではなく、おそらく生活財としてあったものを経塚の外容器として転用したのではないかと思われます。渥美製品の鎌倉への入り方については、用途という点をもう少し追究する必要がありますと思っています。

また、渥美は大体2 a期、2 b期の2段階のものが中心で、3段階の山茶碗が入ってくるかどうかについては、私にはよくわかりません。渥美の終末は、おそらく常滑に取って代わられると思います。何がその契機になったかと考えると、渥美の生産がストップすることも一因でしょうが、では、なぜ常滑に乗り換えたのでしょうか。似たような機能をもつ常滑とのシェア争いのようなことはなかったのか、ということが消費地サイドとしては気になるところです。

2. 常滑焼の使われ方

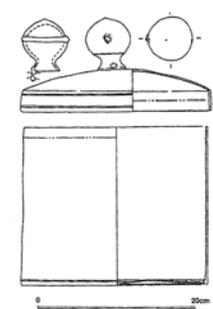
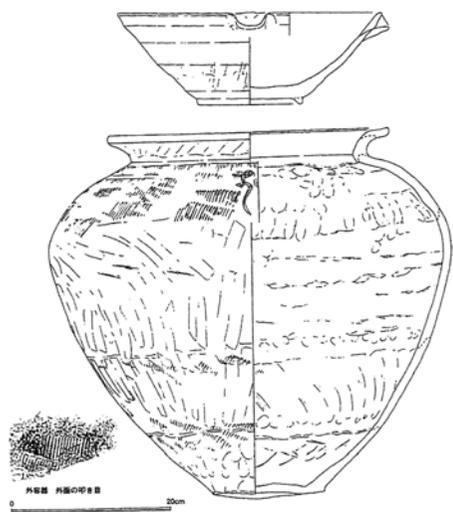
次に、常滑製品の使われ方についてお話しします。

常滑製品がいつから鎌倉で使われるようになったかに関しては、年代観の問題があります。鎌倉の開始年は、頼朝が鎌倉入りを果たす1180年です。その年の暮れに頼朝の御所が完成し、その後、後家人たちも鎌倉に屋敷を構えるようになります。ということで、常滑製品の使用はそれ以降だろうと考えられます。一方で、それまで国元で使っていた古い甕等の家財道具を鎌倉に持ち込んだということも考えられなくもないので、「1180年」というのは決定的な材料にはなりません。

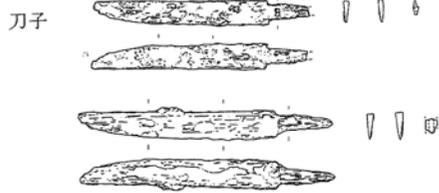
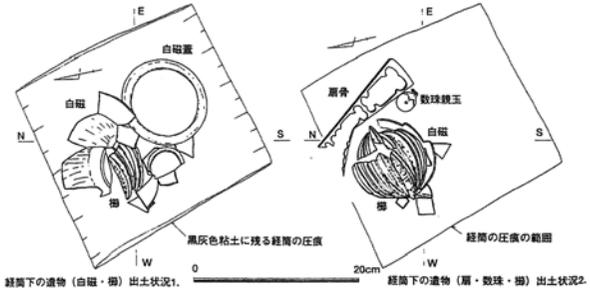
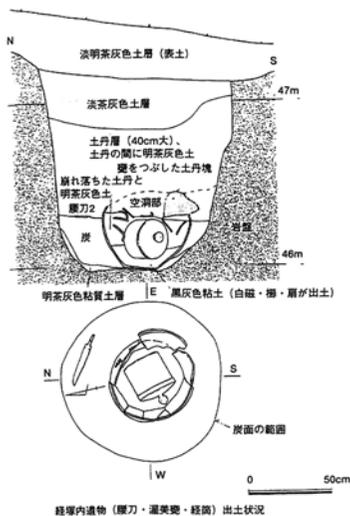
しかし、頼朝の御所では、鎌倉武士が頻繁に宴会を催し、「カラオケ並みに謡をうたい、舞を舞っていた」ということを細川重男氏が著書『頼朝の武士団』に書いておられます。先ほどから酒の話題が出ていますが、消費生活という意味において、武士の文化としての宴会がかなり早くから根づいていたと思われます。つまり、酒盃・肴の器としての「かわらけ」と「武士の文化性としての常滑焼」という見方もできるかと思われます。

『吾妻鏡』には、「建長4年の秋に鎌倉では酒壺37,274口を検注し、1軒に1個だけ残して、

外容器としての渥美甕・鉢



銅製経筒



副納品 (櫛・扇・数珠を白磁小壺に)

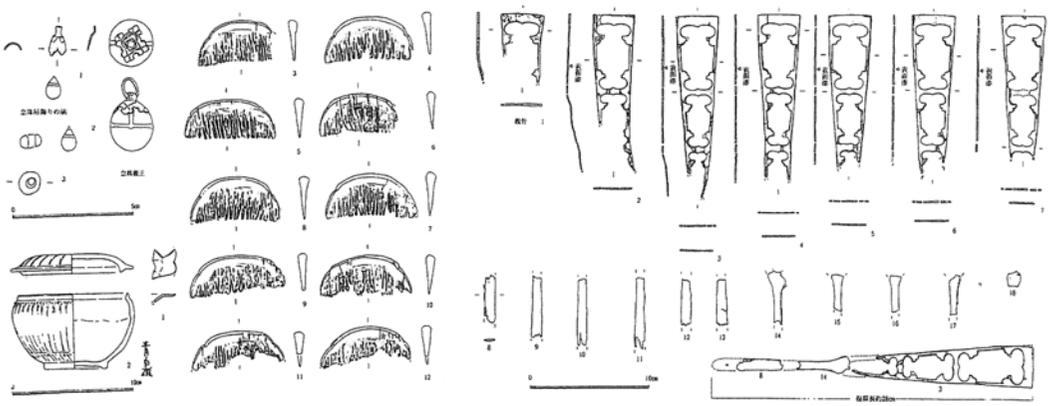


図2 永福寺経塚

残りは全部壊させた」という記述があり、これは恐るべき数だと中野さんはおっしゃいました。では、中世の鎌倉全体では、一体どれだけの常滑焼が運び込まれたのでしょうか。建長4年(1252年)の段階での37,274口という数は、決して過大ではありません。常滑の6型式、7型式が鎌倉で大量に出土することは『愛知県史』でも指摘されており、その前後にも運び込まれたので、さらにその数倍量が使用されたのではないかと思います。

では、鎌倉にどれぐらい常滑焼があるかについてちょっと実物をお見せします。これは甕の口縁部分です。家の近所のお屋敷の生垣から少し顔を出していたので、引っこ抜いてきたものです。形がある程度わかるので、学生の実測練習用に学校に置いてあります。これが胴部の破片だと、スタンブ文でもないかぎり、鎌倉では誰も拾いません。考古学をやっている人間でさえ拾いません。重くてかさばるので、わりと無視されています。そういう意味では、先ほど中野さんから非常に厳しいご指摘がありました。確かに、鎌倉の報告書の資料というのは、報告者が「これを載せよう」と思わないかぎりは載りません。つまり、報告者が無視してしまったものは資料として世に出ないことがあるわけです。

(1) 消費量の問題 —今小路西遺跡(御成小学校内)—

かなり古いものですが、出土点数がわかる資料です(図3)。

鎌倉市の駅の西側にある御成小学校内で、大きな武家屋敷跡が発掘されました。その南谷4面という広さ約3,600㎡の屋敷地の、その約半分を掘りました。その屋敷地は全部塀に囲まれているので、まさか誰かがゴミを投げ入れることはないだろうと考え、そこで出土したものを集めました。つまり、ある一つの生活面に散らばっていた破片を全部集めたのです。そのうち口縁部や底部を見て、これは少なくとも別個体だと思われるものは、径が出ないまでも断面を載せるかたちで報告するようにしました。これは、おそらくその屋敷での

使用量の一つの目安になるのではないかと思います。

●甕

甕については、24個体ありました。ただ、この甕の口縁部の形態を見ても、実にばらばらです。これが一つの生活面で検出されたということについては、例えば古いものは、下の生活層にあったものが、土木工事等によって掘り起こされて混ざったとも考えられます。また少し時代が下ったものがあるとすると、上から掘り込まれた遺構の中のを層位を見極めずに混同してしまったとも考えられます。こういう言い方をすると、「そんないい加減な調査をしているのか」と思われがちですが、ある程度広い面の調査を行っているときは作業員任せというところもあり、仕方がないこともあります。しかし、混入がなかったとすれば、これがある生活上のものと言えます。

●壺

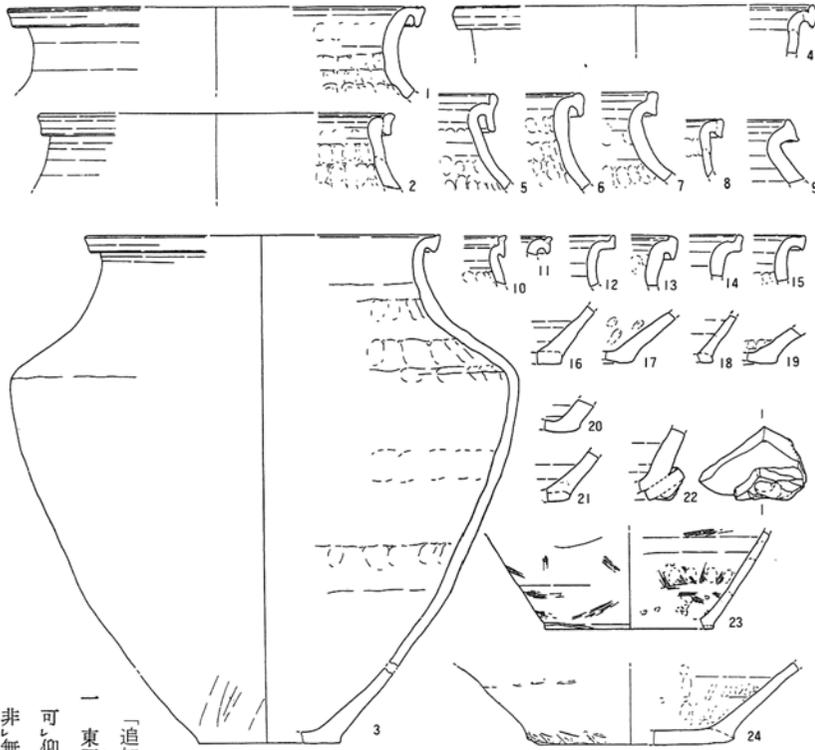
壺4個、鳶口壺4個、鉢2個が出土しています。これは破片で、小さいものです。実はこの屋敷は火事で焼けたようで、大きいものはともかく、小さいものは持って逃げた可能性があります。この屋敷の北隣の焼け跡からは、青磁の太鼓胴の浮牡丹文の水指が見つかっています。静嘉堂文庫にあって重要文化財に指定されているものと同形です。その中型品では、蓋だけ残っており、本体については破片1つ見当たらなかったもので、もしかしたら持って逃げたのではないかと思います。出土点数が少ないのは持ち去られたことも考慮すべきでしょう。

●鉢

鉢Ⅱ類が出土しています。17個体見つかっています。口縁の形態からすると、結構古いものがあると思われれます。口縁が若干平たく、引き出された形となる新しい傾向も見取れます。また、鉢Ⅰ類については、53個体見つかっています。

この屋敷の存続年数については異論があるので、「鎌倉時代後期の生活面」とだけ申し上げておきますが、甕と鉢の出土数を比較したところ、鉢の方が圧倒的に多く出ています。ということは、

今小路西遺跡（御成小学校内）南谷4面
—約3,600㎡の邸宅内の出土—



(甕は24個体)

(壺4個体：鷹口壺4個体、鉢2個体)

(鉢Ⅱ類は17個体)

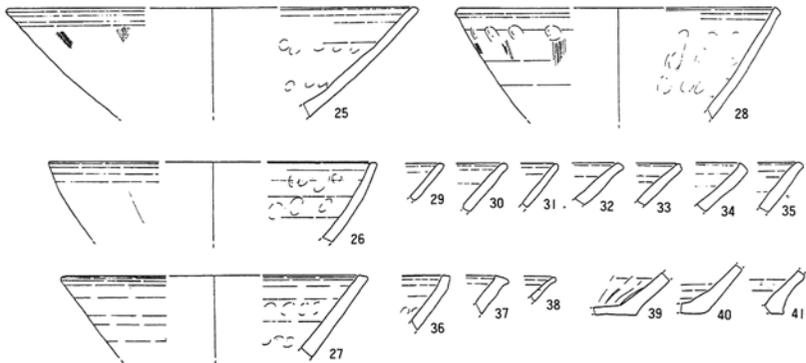


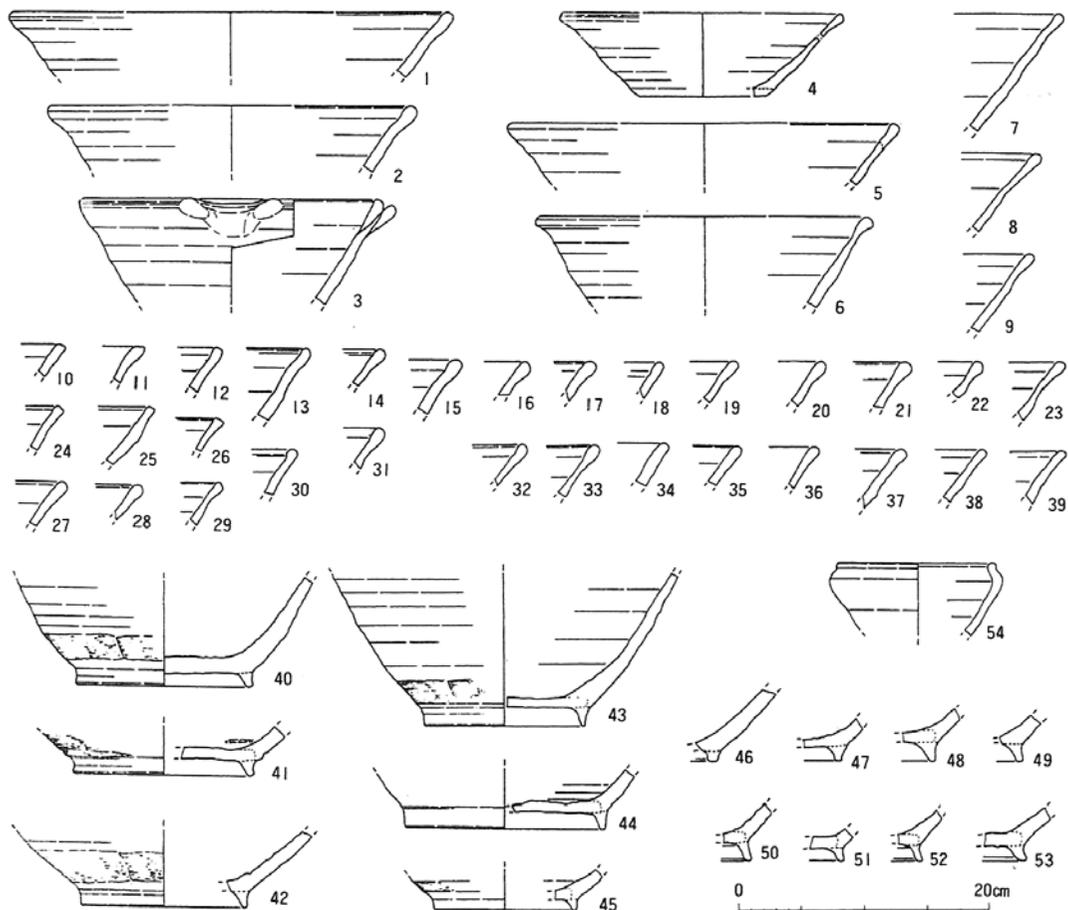
図3 今小路西遺跡（御成小学校内）発掘

『吾妻鏡』建長四年（一二五二）九月
卅日 辛亥 天晴る。鎌倉中の所々に沽酒を禁制すべきの由、保々奉行人等に仰す。よつて鎌倉中の所々の民
家において注すところの酒壺三萬七千二百七十四口と云々。また諸國の市酒全分停止すべきの由と云々。
『同』同年十月
十六日 丁卯 天晴る。沽酒の禁制、殊にその沙汰あり。ことごとくもつて壺を破却せらる。しかうして一屋
に一壺はこれを有めらる。ただし他事に用ゐるべし。造酒の儀あるべからず。もし違犯の輩あらば、罪科に處せ
らるべきの由、固くこれを定め下さると云々。

一 東國沽酒事・
「追加法」文永元年（一二六四）四月十二日
可_レ仰_二守護人并鎌倉地奉行、費_レ糜尤甚、永可_レ停止、次近年多稱_二土極_一運_レ自_レ筑紫、
非_レ無_二其費_一、同可_レ停止之、

図45 南谷4面出土遺物—南谷11

図484 南谷4面出土遺物——山茶碗窯系こね鉢



(鉢 I 類は 53 個体)

* 底板の抜けた例が多い



研磨痕ある陶片(南谷3面)

図469 南谷3面出土遺物——研磨痕ある陶片

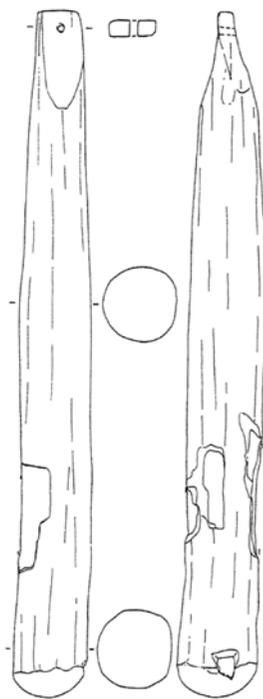
図3 今小路西遺跡(御成小学校内)発掘

たくさん使われていたといえます。

●スリコ木

スリコ木(図4)もたくさん出土しています。すり鉢で何かすったのだらうと思います。実はこの時期、鎌倉ではまだ石臼は普及していません。ということで、こね鉢と称している片口鉢が、おそらく穀物を粉末にする道具ではないかと考えています。例えば、永福寺で花粉分析を行った時には、蕎麦の花粉が見つかっています。あるいは頼朝の時代には、麦畑に賦課をするかしないかという話がみえ、鎌倉の近くでも結構麦を作っているわけです。また、北条重時の家訓には、「麦風情のものを食うときに能がましく食うな」とあります。すなわち、この時期を考える場合は、麦や蕎麦粉というものを考える必要があると思います。いずれにせよ、鉢というのは、多くの需要があったと思われる。

ところで、常滑Ⅰ類の鉢は、底板が非常に薄く作られています。下手にスリコ木で底部を突くと、すぐに割れてしまいます。破片を見ると、底板が



15. 7期 327

図4 スリコ木

抜けたものが結構あります。つまり、鉢は耐久消費財ではなく、壊れては買うというような消耗品として使われていたのではないのでしょうか。

●研磨痕ある陶片

研磨痕がある陶片も出土しています。常滑の大甕では、ひびの裏から漆布を張って水漏れを防いで使われているものがあります。あるいは、破片を漆で接着して継いで使っているものもあります。鎌倉には非常に大量の甕が入ってきますが、これは決して安くて大量に手に入るというのではなく、それなりに値段が張り、それを大事に使っていたからです。ただ、ばらばらに割れてしまうと手の尽くしようがありませんが、それでも破片を砥石代わりにでもしたのでしょうか、何をすったのかはわかりませんが、角をすり減らしたものが多く出てきます。

また、八重樫さんのお話では「経塚の回りに大甕の破片があった」ということですが、それと同様に、囲炉裏の縁に常滑焼の破片を立て並べて、一種の耐火装置にしていたものもみつかっています。破片になっても結構使いみちがあったようです。

さらに、割れた甕の底部内側には、稀にスリコ木ですったと思われる磨滅痕が認められることがあります。つまり、割れた甕でも鉢状の形を保っていれば十分に使えたのでしょう。なかには、割れ口のふちの部分の部分を片口状にすり減らして窪みを入れているものもありました。

(2) 甕の押印、窯印

甕の押印の例を載せました(図5)。先ほど展示室で、プリントアウトされたものを見てきましたが、なかなかぴったり一致するものはありませんでした。これについても、先ほど中野さんから「常滑のスタンプさえ十分に集成していない」と厳しく指摘されました。確かにそのとおりで、いつか手をつけなければいけないながら日が経ってしまいました。生産地のデータベースができたので、もう少し鎌倉の常滑研究も進むのではないかと思います。

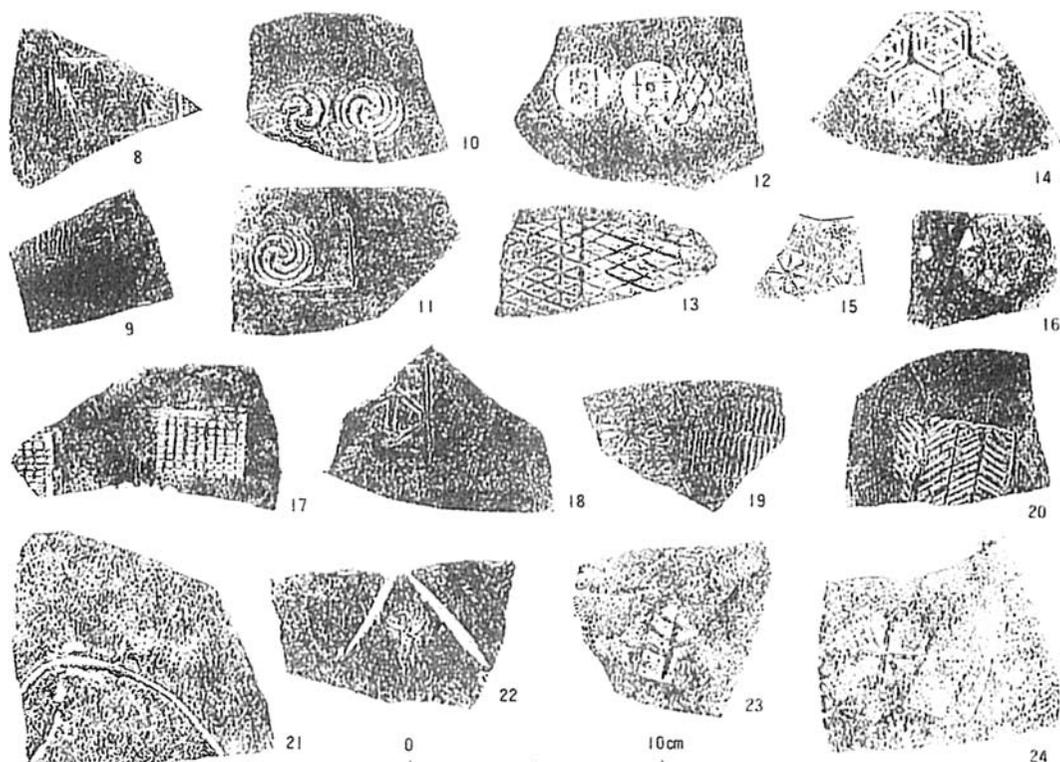


図5 甕の押印・窯印の例

(3) 蔵骨器として

常滑製品は、蔵骨器としてもよく使われていました(図6)。

鎌倉では、武士・僧侶階級は、死後は茶毘にふし、遺骨を骨壺としての常滑壺あるいは瀬戸四耳壺等に入れていました。そして、これを「やぐら」という鎌倉独特の墓に入れました。やぐらとは、崖に四角い部屋を掘りこんで、その床下に穴を掘って蔵骨器を入れ、上にはたいてい供養塔として五輪塔等を建てたものです。鎌倉時代後期から南北朝期に多く造られました。常滑焼はその骨壺としてかなり使用されています。ただし、ここでは瀬戸焼も使われています。さらに、全身骨が必ずしも全て入れられるとはかぎらず、例えば常滑鳶口壺や瀬戸の水注等のやや小さい容器に分骨して納骨することもあったようです。

使用数に関しては、盗掘にあつて骨董屋に流れたりしているため、鎌倉全体でどれぐらいの量を骨壺として使っていたのかは、統計の取りようがありません。

(4) 袍衣(えな)埋納容器として

常滑製品は、袍衣埋納容器としても使われていました(図7)。

袍衣にかぎらず、何かまじないものを埋める際に、その容器として常滑の壺や瀬戸の小壺等を使ったようです。

若宮大路周辺遺跡群から出土した袍衣埋納壺には、中に墨と銭が入っていました。おそらく生まれたのは男の子で、能筆家とか役人として出世するようという願いが込められたのだらうと思います。倉庫群から道路に出るところに埋められていました。この倉庫群については、流通に関わることなので、最後に触れます。

(5) 倉庫床下の埋甕として

常滑の甕は、倉庫床下の埋甕としても使われていました(図8)。

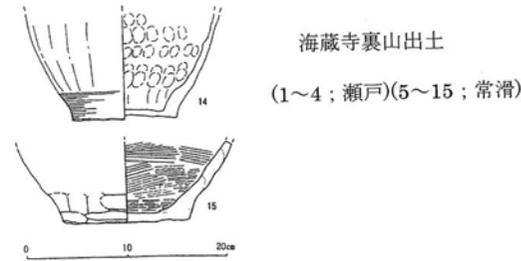
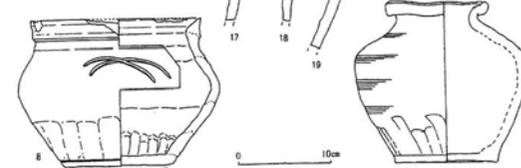
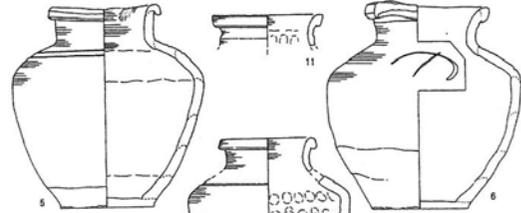
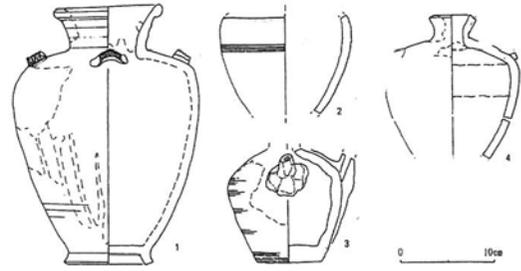
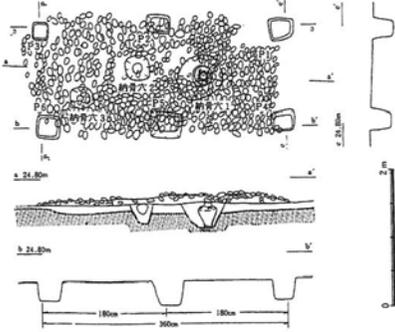
倉庫自体は、石を並べた上に根太(ねだ)を渡し、床板を張っています。甕は、床下の地面と同じレベルに口が来るぐらいに埋められていました。



1号やぐら内の切石積と玉石

山王堂東谷やぐら群

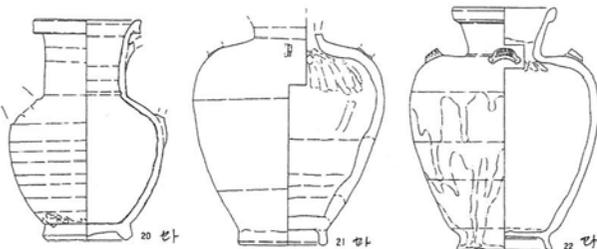
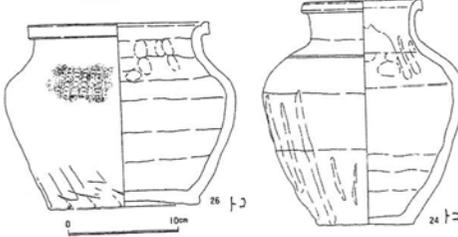
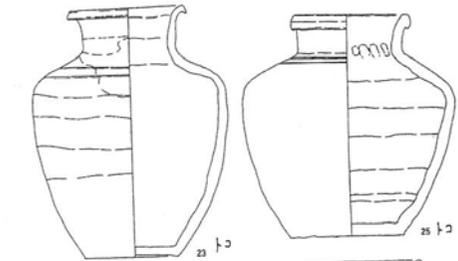
石塔まわりに写経石
その下に蔵骨器
(新善光寺やぐら群)



海蔵寺裏山出土

(1~4; 瀬戸)(5~15; 常滑)

佐助ヶ谷やぐら群出土 (20~22; 瀬戸)(23~26; 常滑)



江戸時代に
記録された
やぐら
(寿福寺)



録會撰勝考 文政12年(1829)

図6 蔵骨器としての常滑製品

若宮大路周辺遺跡群(小町 1-325-1)
(通称秋月地点)

倉庫群(倉町)から道路へ出る所に

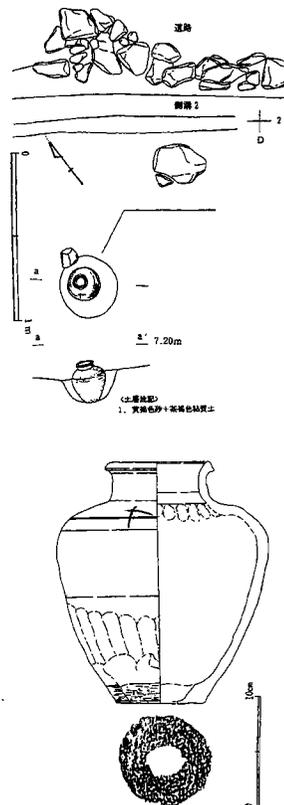
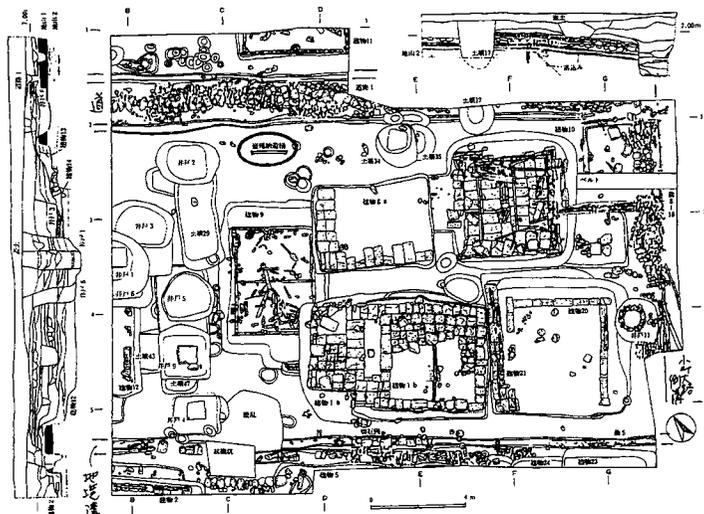


図7 胞衣(えな)埋納容器として

若宮大路周辺遺跡群(DSC地点)
床下の水抜き穴か、密造酒か、染料甕か

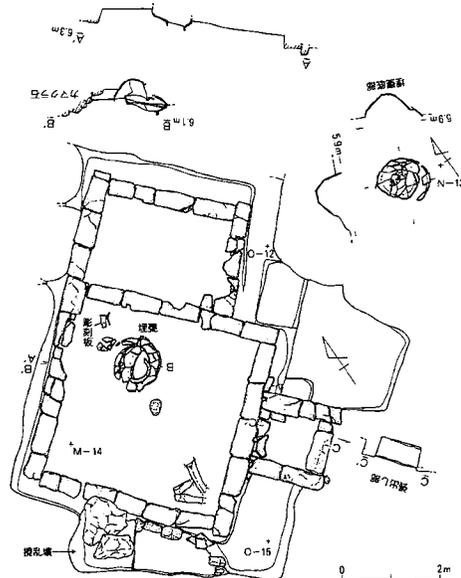


図30 方形竪穴建築址1 鎌倉石列と埋甕

甕内と割れ口に
銭 59枚が

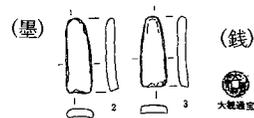
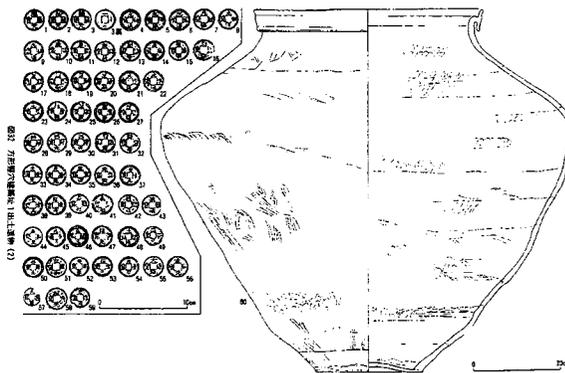


図8 倉庫床下の埋甕として

これは、染物の藍甕ではないかという説もあります。あるいは、密造酒といわれる、沽酒を造った甕ではないかという説もあります。また、鎌倉は地下水位が比較的高く、竪穴を掘ると水が湧いてくることから、その水を汲み出すための埋め甕ではないかという説もあります。ただ、その甕内に銭が59枚入っていたため、一種のマジカルな埋め戻しではないかとも思われます。

(6) 経塚外容器として

また、常滑製品は、経塚の外容器としても使われていました(図9)。

浄光明寺という北条氏が建てた寺では、その境内絵図が10年ほど前に再発見されました。そのなかに、「経塚」と書かれたところがあります。

そこから、型式では7型式か8型式に近いと思いますが、常滑の甕が出土しています。この中にお経の本体は残っておらず、甕の底には炭が詰まっていただけでした。

境内図が描かれたのは建武2年(1335)以前で、鎌倉幕府滅亡後、すなわち1333～1335年という本当に短い間であることは間違いのないと思われます。甕そのものは後に掘り出されて埋め直されたとか、経だけ取り出されたのかもしれないので、絵図だけから甕の年代を決めるのは難しいかもしれません。

(7) 大量埋納銭の容器として

また、常滑製品は、大量埋納銭の容器としても使われていました(図10)。

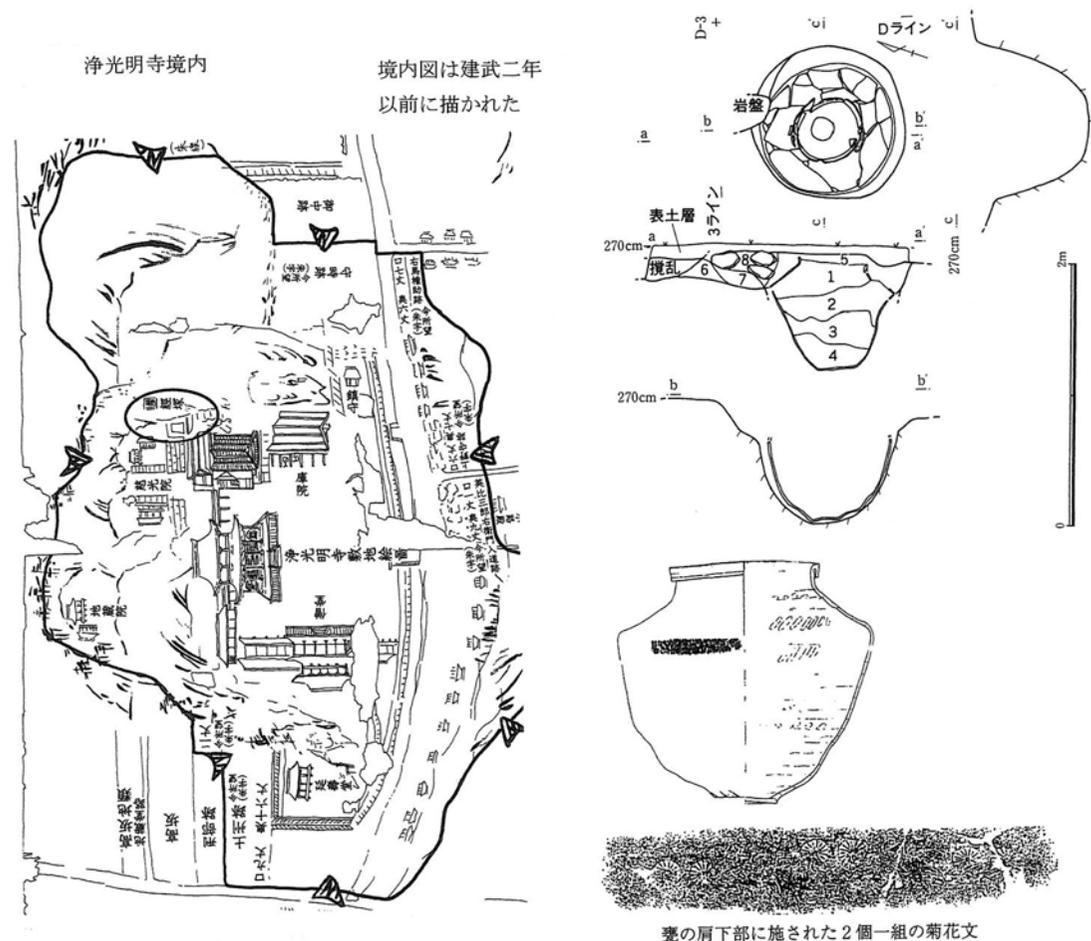


図9 経塚外容器として



常滑大甕発見状況



古銭収納状況

浄智寺門前出土

銭は推定 18 万枚
(最新銭は永楽通宝)

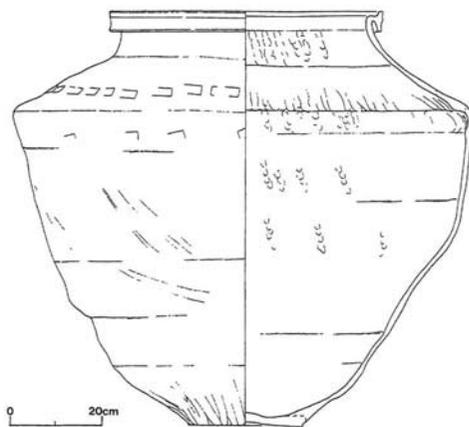


図10 大量埋納銭の容器として

かなり以前、浄智寺という北鎌倉にある鎌倉五山のお寺の門前で、7型式か8型式の常滑の甕が発見されました。内側にさし銭状態の銭が、ぐるぐるとぐるを巻くように詰めてありました。まだ全部の銭を数え終わっていませんが、18万枚ぐらいあるようです。ただし、この中にある最新の銭は明の「永楽通宝」なので、甕が作られたのは14世紀前半から中頃だとしても、埋められたのは14世紀後半以降と考えられます。そもそも洪武銭や永楽銭、特に永楽銭を大量に含んだ埋納銭というのは、少し時代を下げて考える必要があります。ということで、14世紀後半以降、むしろ15世紀に入るのではないかという気がします。この甕は、作られてから埋めるまでの間、かなり長い期間どこか別の所にあったのでしょうか。

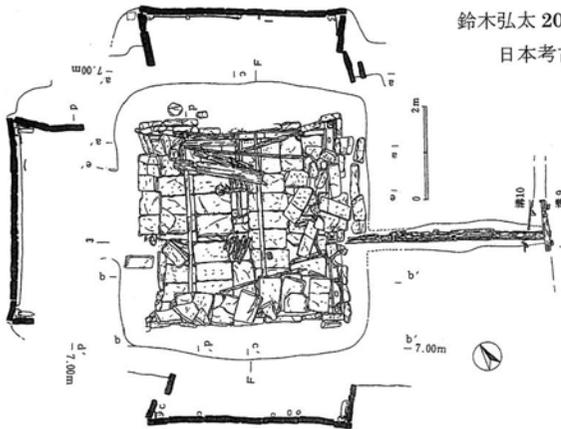
3. 常滑編年が鎌倉にもたらした恩恵

常滑の編年は、7型式以降は半世紀ごとになるので、かなりの年代幅を取らなければならないという点はあるにしても、型式の並び順は間違いありません。私の教え子の鈴木弘太君は、鎌倉で発掘される地下式の倉を「堅穴建物」と言っています。この蔵について簡単な図を載せました(図

11)。約4m四方、深さ約1.5mのいわゆる地下室、地下倉です。地上の建物がどうなっていたかはわかりませんが、これがそのまま自然に埋まった例は一つもありません。だいたいは中のものを選び出して、使える材木や石は抜いて埋めてあります。埋めてそれほど時間が経たないうちに、また新しい蔵を建てるという具合いで、建て替えを頻繁に行っています。

それで、その埋め立てた土の中に常滑のどの型式が入っているかという調査を行いました。遺構重複を切り合いと言いますが、前のものが埋まった上に建物を重なるように建ててあるため、そこから前後関係がわかるわけです。それぞれの中から常滑の何型式が出てくるかという表にまとめると、いくつかの建物で、アミ部分が斜めに並びました。つまり、一番新しいものが出土するアミかけの右端がその堅穴が埋まる時期に一番近いという考え方です。つまり堅穴の年代決定につかえます。13世紀の中頃にはじまり、なかには14世紀を超えて15世紀に下るものもあります。鎌倉における堅穴建物は地下蔵と考えてよいと思いますが、鎌倉武士の都会生活を支えるために欠かせない物資の収納・流通拠点だったのではない

鈴木弘太 2006 「中世「堅穴建物」の検討—都市鎌倉を中心として—」
日本考古学第 21 号



鎌倉に多数検出された堅穴建物
(地下倉)の覆土出土の最新型式が
遺構の廃絶期に近い

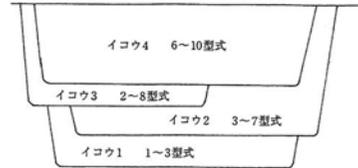


表1 鎌倉遺跡群における堅穴建物の消長

地点	切合群 No.	遺構名	分類	12世紀		13世紀				14世紀		15世紀	
				3/4 2型式	4/4 3型式	1/4 4型式	2/4 5型式	3/4 6a型式	4/4 6b型式	前半 7型式	後半 8型式	前半 9型式	後半 10型式
秋月	1	建物 1 a・b	I				1			1	2		
		建物20	I										
		建物21	I							4			
		建物25a	I						1				
		建物25b	I				1						
		建物27	I			1	1						
秋月	2	建物 8 a	I						1	2			
		建物8b	I				1	2					
		建物9	I		1		8	14	5				
秋月	3	建物8a	I						1	2			
		建物8b	I				1	2					
		建物10	I				4	2					
DSC	1	方壱1	I		1	1	4	6	2	2			
		方壱9	I		1	2	4	8	1				
		方壱10	I			1	10	2					
DSC	2	方壱4	I			1	3	2	1				
		方壱7	I		1			4					
		方壱2	I				1						
DSC	3	方壱14	I		2	1	6	9	2				
		方壱13	I			1	5	8	6				
若宮荘	1	方壱1	I					3	5	4	2	1	1
		方壱6・7	I				8	7	3		2	4	5
		方壱8	I				2	2	2			2	
		方壱61	I				4	1	1				
若宮荘	2	方壱2・3	I				2	4	3	5			
		方壱4	I				2	4	5	3			
若宮荘	3	方壱62	I				2	1					
		方壱63	II					1					
若宮荘	4	方壱23	I					1		2			
		方壱20	I					2	2				
		方壱21	I				2	2	1	3			
		方壱30	I				1	3	1				
若宮荘	5	方壱24	I					1	4	1	3		
		方壱29	I							1			
若宮荘	6	方壱26	III				2	2	2				
		方壱27	I					1	1				
若宮荘	7	方壱18	I			1	4	1	1	8			
		方壱22	I				2	3	4				
ハイツ	1	H T-16	I			1	2	2	2				
		H T-21	I				1	1	1				
ハイツ	2	H T-38	I				4	1	2	2			
		H T-39	I			1	1	3	2				
ハイツ	3	H T-90	I					2	2				
		H T-84	III				3	2	2				

※ [陰影] は廃絶時期を示す。

遺構重複(切り合い)
と覆土の遺物の型式
模式図

図11 常滑編年が鎌倉にもたらした恩恵

かと私は思っています。それが鎌倉幕府滅亡後もある程度は続くのではないかということです。

最後になりますが、常滑製品の生産量、つまり1つの窯で焼く量は解明されてきました。それをどうやって消費地まで運んだのかについては、いろいろな方がいろいろな説を唱えておられます。

ただ、この時代は生活物資に関する文献資料がきわめて少ないと言っているため、考古学的な分布からモノの動きを調べるしかないでしょう。その際には、鎌倉で非常に多くの物資を貯めておける蔵の存在を無視できないだろうと思っています。

以上で、鎌倉の話を終わります。どうもありがとうございました。